

児童養護施設で生活する子どもの気質研究

—3~7歳児を中心として—

戸松玲子

I 序

現在、子どもの発達行動上の問題を中心に、医学・心理学・教育学を始めとする各専門領域において、子どもの成長・発達や人格形成についての論議がなされるようになってきた。子どもの成長・発達や人格形成には、家庭的・社会的・経済的問題も絡んでおり、子どもの健康な成長・発達や人格形成を支援していくためには、様々な観点からの理論的・実証的考察を行い、統合していくことが重要であろう。特に、子どもの虐待問題や養護施設で生活をしている子どもと養育者への支援には、各専門領域との連携及び協働による支援活動が必要かつ、重要である。

子どもは年齢が低いほど、養育者をはじめとする周囲の環境に依存しなければ自らの生命を維持することは困難であり、周囲への援助を求める手段やスキルに乏しく、そのサインも伝わりにくい傾向にある。それゆえ、一般的に、子どもの虐待問題や児童養護施設へ入所せざるを得ない状況下にある家庭の養育者などに対しては、養育者の社会的地位や経済的な問題、養育者の人格の問題に伴う養育者の養育態度の不良さに問題があるという見方が大半を占めていると考えられる。

しかし、子どもの成長・発達や人格形成の原点は、子どもと養育者の“関係”である。子どもの成長・発達や人格形成には、養育者の養育態度だけでなく、子ども自身に内在する遺伝的・生物学的要因による個人差が養育者と子どもとの関係に相互的に作用し、養育者の感情や養育態度に影響を及ぼしている可能性がある事を考慮しながら支援活動を行っていかなければならない。

遺伝的・生物学的要因による個人差には、大きく分けると、身体的特徴と行動特徴の二つが考えられる。身体的特徴は身長・体重を始めとする、顔立ちや手足

の形等の個人差によるものである。行動特徴は、能力や動機付け、感じ方や環境への働きかけの仕方によって生じるもの、すなわち、内面的特徴が行動と言う形で外在化された個人差によるものであると言えよう。身体的特徴は表面的なものであり、比較的容易に個人の特徴が他者に伝わり易く、個人の特徴と周囲との調和が図り易いであろう。それに対し、行動特徴は内面的な要素を絡めており、個人の特徴が他者に伝わり難い傾向にあり、個人の特徴と周囲との不調和が起り得る可能性も考えられる事から、社会的・情緒的にも不適応な行動が生じる可能性を孕んでいると言えよう。

ゆえに、子どもの行動特徴を周囲が理解しておくという事は、子どもと養育者（環境）の調和を図り、子どもの成長・発達や人格形成を促す一手立てと成り得る。

このような観点から、それぞれの子どもの行動特徴と養育者との関係が、子どもの情緒的問題の発現とどのような関連があるのかを1956年より30年以上に亘って、長期的・縦断的に追跡調査したものに、Thomas & Chess らによる、ニューヨーク縦断研究 (NYLS) がある。①Thomas & Chess は、行動を3つの側面から捉えており、第1は、何を (What) するかという能力 (ability) に関する側面。第2は、なぜ (Why) するかという動機 (motivation) に関する側面。第3は、どのように (How) するか (way) という側面である¹⁾。②この第3の側面は、生物学的基盤の上に存在するとされ、生後間もない頃からその特徴は見られ、将来形成される人格の素材であるとされている²⁾。③研究当初、行動特徴は“一時的な反応のパターン”とされていたが、その後の研究経過により、子どもの行動特徴は、不変的なものではないが、ある程度の安定性、恒常性が見られる事から、“気質”と称されるようになった³⁾ (以下、本論分では、Thomas & Chess らの概念に従い、行動特徴を気質の特徴と称

す)。

本研究では、子ども側に内在する要因、すなわち、気質の特徴を理解し、子どもの健康な成長・発達や人格形成を支援するための理論的・実証的考察を行う第一歩として、Thomas & Chess の概念に従い、児童養護施設で生活をする子どもの気質についての考察を行った。

II 気質の概要

気質 (Temperament) とは人格の素材的側面であり、個人の行動を規定する身体的・素質的な特性で恒常的である⁴。気質に遺伝的・生物学的な基礎があるのかどうかに関しては、決定的に解明されたわけではなく、気質概念については研究者によって異なるが、これまでの気質研究の一致するところで、庄司は以下のようにまとめている。「①気質とは、個々の行動ではなく、行動の傾向を反映するものである。②気質的特徴の少なくとも一部には生物学的基礎があると考えられる。③気質は、発達の普遍的なパターンではなく、個人差によって特徴づけられる。④気質的特徴は乳児期に出現し、のちの人格形成の基礎となる。⑤気質的特徴はある程度安定している。⑥気質は変化しうるものである」⁵。

また、最近では、Kernberg らは、「他者へのアプローチや反応性の質と方法が一定の傾向を帯びることによって、子どもと世界との交流に影響を与えるような生物学的な基盤を持つ性質」⁶としており、気質を人格形成に影響を及ぼす一要素として取り上げている。

この様に、気質とは、個人が外界をどう認識し、どう働きかけるのかということであり、決定的に解明されたわけではないが、遺伝的・生物学的なものを基盤としてと同時に、環境からの影響も受けて変容する可能性があり、人格形成の一部となるということであろう。

III 気質の先行研究

—Thomas & Chess の概念 (NYLS を中心として)—

Thomas & Chess らは、子どもの個々の反応パターンがどの程度、本能的に決定されるのかを評価するために、1956年よりニューヨークで縦断的研究を始めた。これは、New York Longitudinal Study (NYLS) とよばれ、現在の気質研究の基礎となっている。Thomas & Chess は児童精神科医である。彼らは、子ども

の臨床的問題には、環境要因だけでは説明不可能であるということから、130名の子どもを対象に、生後2、3ヶ月のときより、約30年以上にわたり、子どもがどのような場面で「いかに (How) 行動するか」について、養育者と定期的に面接を行い、子どもの行動の個性についての研鑽を重ね⁷、子どもの気質が人の「適応」にどのような影響を及ぼすかということを追跡調査し、子どもの気質と養育環境との「適合のよさ (goodness of fit)」, 「適合の悪さ (poorness of fit)」という概念を提起した⁸。「適合のよさ」は養育者やその他の大人の期待や要請が子どもの気質や能力などの特徴と互いに相いれるものであるときにみられると考えられ、この場合子どもの健全な発達が期待され、「適合の悪さ」は養育者などからの期待や要請が過度なものであったり子どもの気質や能力などの特徴と相いれないものであるときに生じ、子どもは強いストレスのもとにおかれて健全な発達が妨げられるというのである⁹。

Thomas & Chess らは、気質的特徴を、Activity level 活動性・Rhythmicity 規則性・Approach or Withdrawal 接近/回避性・Adaptability 順応性・Intensity of Reaction 反応の強さ・Quality of Mood 気分の質・Attention Span and Persistence 注意の範囲と持続性・Distractibility 散漫性・Threshold of Responsiveness 反応の閾値 (以下 Activity・Rhythm・App/With・Adapt・Intens・Mood・Persist・Distract・Thresh と表す) の9つのカテゴリーに分けた (表2参照)。

さらに、これらを大きく分類し、子どもの気質を5つの類型に大別し、Easy (外界に対して慣れやすい子=養育者側からすると育てやすい子)、Difficult (外界に対してなれにくい子=養育者側からすると育てにくい子)、Slow To Warm Up (外界にゆっくりとなれる子=養育者側からすると立ち上がりに時間のかかる子)、Intermediate-high (どちらかというとなれにくい子=養育者側からすると平均的だが手のかかる子)、Intermediate-Low (どちらかというとなれやすい子=養育者側からすると平均的だが育てやすい子) とした (以下、Easy・Diff・STWU・I-H・I-L <表3参照> と表す)¹⁰。

Thomas & Chess らによる気質類型について、佐藤らは子どもの気質の国際比較をするために日本の子どもたちを対象に子どもの気質の追跡研究を行ったところ、これら5つの気質類型の表れ方は、台湾を例外とすれば、Easy は約40%、Diff は10%程度、STWU は10%以下、I-H は10~15%、I-L は30%前後と

表2 気質カテゴリー(佐藤, 1985)¹⁰⁾

Activity level	子どもの行動に運動成分がどの程度見られるかで、例えば、眠っている間も動く、おもむつを取り替える間も動くなどは活動水準が高いことである。(1:活動性が低い, 6:活動性が高い)
Rhythmicity	睡眠, 食事, 排泄, 動きと休息のリズムなどの様に、反復される機能の規則正しさの程度。毎日殆ど同じ時間に眠くなるようなら規則的である。(1:規則的, 6:不規則的)
Approach or withdrawal	食べもの, 人, 場所, おもちゃ, やり方など, 何であれ新しい刺激パターンに対する最初の反応を記述するカテゴリーである。(1:接近的, 6:回避的)
Adaptability	新場面または状況の変化に対する最初の反応が社会的に好ましい方向へ「変化しやすいか, し難いか」である。最初の反応は回避的であるにせよ, すぐになれるなら「慣れ易い」ということである。(1:順応的, 6:なれにくい)
Intensity of reaction	ここでは反応のエネルギーが問題なのであって, その方向ではない。泣く反応にも笑う反応にも同じ程度の強さというものがあり得る。激しく泣くのも小躍りして喜ぶのもともに強い反応である。(1:弱い, 6:強い)
Quality of mood	嬉しい, 楽しいなどの親和的な行動の量と, 不愉快な, 泣くなどの親和的でない行動の量を比較して, どちらが多いかを記述するためのものである。(1:機嫌がよい, 6:機嫌が悪い)
Attention span and persistence	注意の持続とは特定の活動が時間的にどれほど長続きするかであり, 固執性とは特定の活動が何かに邪魔されても変わらずに続けられる程度である。何れも活動の方向の決定及び一旦決定された方向を変化させることの難しさについていう。遊びを終わりにしなさいといわれても止めないのは固執的である。(1:持続的, 6:持続的でない)
Distractibility	いま進行中の行動の方向を変更させるのに, またはそれを中断させるのに, 外からの刺激がどれほど有効かを表す。例えばコンセントの方に這い進んでいる子におもちゃを見せて, 進む方向が変わったとしたら, 気が散りやすいことになる。(1:散漫的でない, 6:散漫的)
Threshold of responsiveness	反応の閾値とも言われ, 反応を惹き出すのに要する刺激レベルのことである。この場合, 引き出される反応が接近か退避か, 強いかわ弱いかは問題ではない。トーマスたちは刺激閾のほかには弁別閾をもこのカテゴリーに含める。例えば, 母の服装や髪型の変化にすぐ気がつくのは敏感な子である。(1:, 閾値が高い・敏感ではない, 6:閾値が低い・敏感である)

表3 気質類型(庄司, 1988)¹²⁾

Easy	機嫌はよく, 反応の表し方は穏やかで, 生理的機能の周期は規則的で, 初めての事態にも積極的に反応し, 環境の変化にも慣れ易いという特徴をもっている
Difficult	生理的機能の周期は不規則で, 反応を強く表し, 初めての事態では消極的でしり込みしがちであり, 環境の変化には慣れにくく, 機嫌の悪いことが多い。
Slow to warm up	初めての事態では消極的でしり込みしがちで, 環境の変化にもなれにくい, 反応は穏やかで活動性は低い。
Intermediate-high	周期性が不規則な傾向, 消極的でなれにくい傾向, 反応も強い傾向, 機嫌も悪い傾向にある。
Intermediate-low	上記のどの条件にもあてはまらない, 特徴をもっていない普通の子。

規則性・接近／退避・順応性・反応の強さ・気分の質の5つのカテゴリースコアによって個人の気質類型を診断する(時間のかかる子どものみ, 活動性も関与する)。

表4 Comparison of Subgroup Classification of Temperament Among Five Samples (佐藤ら, 1987)

Subgroup	Carey's N=203	Sendai N=304	Nango N=344	Matsuyama N=204	Taiwan N=394
Diff	9.4% (19)	10.2% (31)	10.5% (36)	8.3% (17)	8.3% (29)
STWU	5.9 (12)	9.2 (28)	9.0 (31)	9.8 (20)	2.9 (10)
I-H	11.3 (23)	11.5 (35)	10.5 (36)	13.7 (28)	15.5 (54)
I-L	31.0 (63)	30.6 (93)	33.4 (115)	34.8 (71)	21.5 (75)
Easy	42.4 (86)	38.5 (117)	36.6 (126)	33.3 (68)	51.9 (181)

表 5 Sex Difference in Subgroup Classification of Temperament in Three Samples (佐藤ら, 1987)

Subgroup	Sendai M=157	Sendai F=147	Nango M=175	Nango F=169	Matsuyama M=109	Matsuyama F=95
Diff	10.8% (17)	9.5% (14)	8.6% (15)	12.4% (21)	7.3% (8)	9.5% (9)
STWU	5.7 (9)	12.9 (19)	7.4 (13)	10.7 (18)	8.8 (9)	11.6 (11)
I-H	11.5 (18)	11.6 (17)	11.4 (20)	9.5 (16)	18.3 (20)	8.4 (8)
I-L	31.8 (50)	29.3 (43)	30.3 (53)	36.7 (62)	33.9 (37)	35.8 (34)
Easy	40.1 (63)	36.7 (54)	42.3 (74)	30.8 (52)	32.1 (35)	34.7 (33)

いう傾向は、殆ど変わりが無いことを報告している (表 4, 表 5 参照)¹⁾。

IV 気質調査

児童養護施設で生活する 3~7 歳児の気質を中心として

1 目的

子どもの気質の特徴が、育児上の問題や集団適応上の問題の一因となるのは、環境との「適合の悪さ」が問題となる場合である。養育者が子どもの気質を理解するということは、子どもの気質の特徴と環境との「適合のよさ」を図る手立てとなる。

最近、虐待という措置理由で児童養護施設に入所する子どもの数が増えてきている。虐待という現象に対して、また、児童養護施設に入所せざるを得ない状況下にある家庭の養育者などに対しては、養育者の社会的地位や経済的な問題、養育者の人格の問題に伴う養育者の養育態度の不良さに問題があるという見方が大半を占めている。さらに、児童養護施設で生活をする子どもたちは、家庭とは異なる特殊な養育環境下で生活をしていることから、発達行動上の問題が多くあるとされがちである。このように、児童養護施設で生活をする子どもたちの成長・発達や人格形成の過程は、環境要因に問題があるとされる事が多く、子ども側の要因から子どもの成長・発達や人格形成への支援をあまり考慮していないと考えられる。

しかしながら、子どもの成長・発達や人格形成は、子どもと養育者との「関係」によって営まれているという観点から考えると、子どもが養育者に与える影響というものもあるはずである。

よって、本研究では、1) 児童養護施設で生活する子ども達と幼稚園や保育所に通う子ども達との間に気質類型の差異があるのか、2) 措置理由によって気質カテゴリー間に差異はあるのか、3) 児童養護施設で生活する子どもには標準値との間に気質カテゴリーの差異はあるのか、4) 性別による気質カテゴリーの差

異はあるのか、5) 年齢によって気質カテゴリーの差異はあるのか、6) 入所期間によって気質カテゴリーの差異はあるのかについて検討し、児童養護施設という特殊な環境下で生活する子どもの理解を深め、児童養護施設で生活を送る子どもの成長・発達や人格形成を支援するための一方策を探ることを目的とする。

2 対象と方法

平成 12 年 11 月 12 日から 11 月 31 日にかけて、兵庫県下の児童養護施設 14 ヶ所 (神戸市は除く) に入所している 3~7 歳児 (月齢 36~95 ヶ月) の児童 247 名 (男児 133 名, 女児 114 名) を対象として、気質調査を行った。

方法は、兵庫県下の児童養護施設の職員を対象に気質に関する事前研修会を開催して、子どもの気質についての知識を提供した。その後、Behavioral Style Questionnaire (McDevitt & Carey, 1978) を庄司らが日本語に翻訳した「幼児行動様式質問紙」を各施設に配布した。質問紙の記入は、対象児童の担当職員を中心として行われ、郵送にて回収した。回収した質問紙の集計処理を行い、気質類型の分類 (Easy・Diff・STWU・I-H・I-L) 及び、気質カテゴリー別 (Activity・Rhythm・App/With・Adapt・Intens・Mood persist・Distract・Thresh) による気質の特徴の分析を行った。

統計処理には、気質類型間では χ^2 検定、標準値と対象児童間では z 検定、各カテゴリー間では t 検定を用いた。

児童養護施設入所の措置理由に関しては、子どもセンターから児童養護施設への措置理由書によった。

個々の子どもの分析結果を各施設に報告し、日々の子どもとのかかわりに役立てるために、担当職員との検討会を開催した。

3 結果

1) 回収率及び調査対象

調査児童 247 名全てから回答が得られ、回収率は

100%であった。そのうち、記入が不適当な2名を除き、245名(男児133名、女児112名)を調査対象とした。調査対象の平均年齢は、 5.6 ± 1.5 歳(67.0 \pm 17.8ヶ月)で、入所期間は0~68ヶ月、平均入所期間24.1 \pm 17.9ヶ月であった。

2) 気質類型結果

①全体

調査対象児童の気質類型は、「I-L」が最も多く、次いで「STWU」、「Easy」、「I-H」、「Diff」の順で、「I-L」と「STWU」とで6割を占めていた(表1、図1)。

②性差

男児では、「I-L」が最も多く、次いで「STWU」、「Easy」、「I-H」、「Diff」の順であった。女児では、「STWU」が最も多く、次いで「I-L」、「Diff」であり、「I-H」及び、「Easy」が同数で最も少なかった。

性別よる、気質類型の間に統計的な有意差は認められなかった(図2)。

③年齢別(未記入2例を除く)

3歳児では、「STWU」が最も多く、次いで、「I-L」、「I-H」であり、「Easy」、「Diff」は同数で最も少なかった。4歳児は、「STWU」が最も多く、次いで、「I-L」、「Diff」、「I-H」、「Easy」の順であった。

5歳児は、「STWU」、「I-L」が同数で最も多く、次いで、「Easy」、「I-H」、「Diff」の順であった。6歳児は、「I-L」が最も多く、次いで、「STWU」、「Easy」、「Diff」、「I-H」の順であった。7歳児は、「I-L」が最も多く、次いで、「STWU」、「Diff」、「I-H」、「Easy」の順であった。

各年齢ごとの気質類型の間に統計的な有意差は認められなかった(図3)。

表1 気質類型内わけ

	Easy	Diff	STWU	I-L	I-H	合計
対象児童	34	30	73	76	32	245
(%)	(13.9)	(12.2)	(29.8)	(31.0)	(13.1)	(100.0)

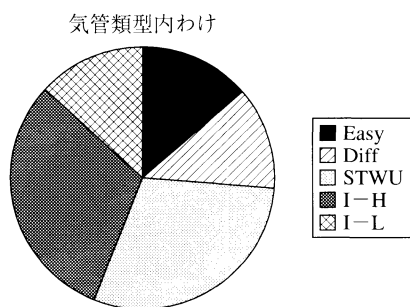


図1

④入所期間別(未記入10例を除く)

入所期間が、1年未満(0~11M)の児童では、「I-L」が最も多く、次いで、「STWU」、「Easy」、「I-H」、「Diff」の順であった。1年~2年未満(12~23M)の児童は、「STWU」が最も多く、次いで、「I-L」、「Easy」であり、「Diff」、「I-H」は同数で最も少なかった。2年~3年未満(24~35M)の児童は、「I-L」が最も多く、次いで、「STWU」、「Diff」であり、「Easy」、「I-H」は同数で最も少なかった。3年~4年未満(36~47M)の児童は、「STWU」、「I-L」が同数で最も多く、次の「Diff」、「I-H」も同数であり、「Easy」は最も少なかった。4年~5年未満(48~59M)の児童は、「STWU」が最も多く、次いで、「I-L」であり、最も少なかった「Easy」、「Diff」、「I-H」は同数であった。入所期間5年以上(60M~)の児童は、「STWU」が最も多く、次の「Diff」、「I-H」は同数であり、最も少なかった「Easy」、「I-L」も同数であった。

入所期間別ごとの、気質類型の間に統計的な有意差は認められなかった(図4)。

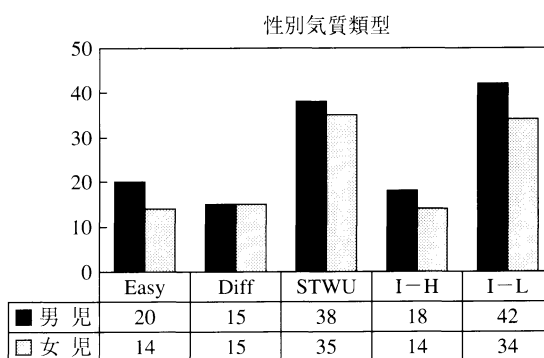


図2

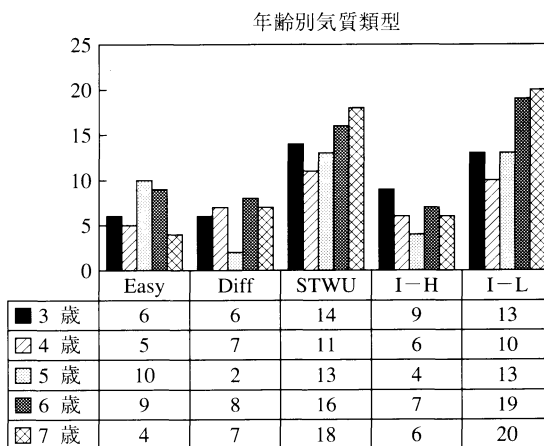


図3

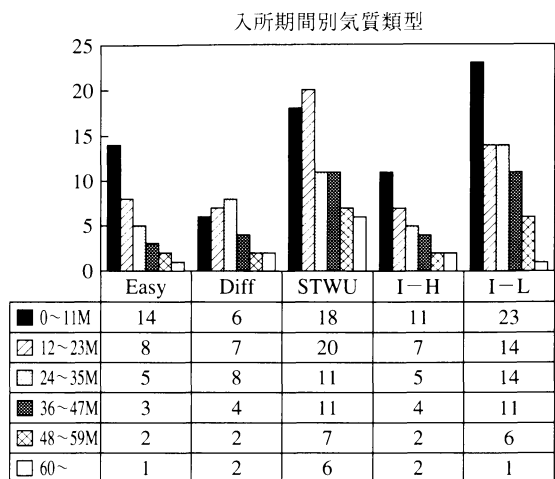


図 4

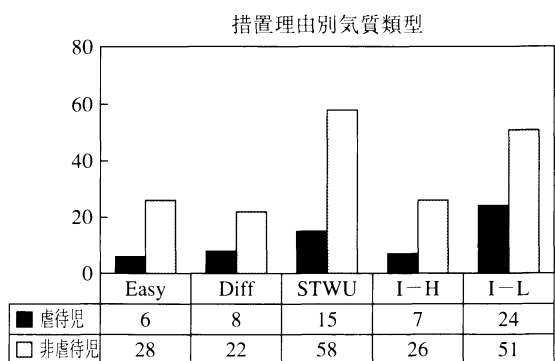


図 5

⑤措置理由別

虐待が措置理由として示されたものは、245 例中 60 例で 24.5% を占め、非虐待児は 185 例で 75.5% であった。

虐待児では、「I-L」が最も多く、次いで、「STWU」、「Diff」、「I-H」、「Easy」の順で、非虐待児では、「STWU」が最も多く、次いで、「I-L」、「Easy」、「I-H」、「Diff」の順であった。

措置理由別による、気質類型の間に統計的な有意差は認められなかった(図 5)。

3) カテゴリー分析

①全体

対象児童全体のカテゴリー別平均値を算出し、気質類型評価のための標準値との比較を行った。

App/With, Adapt, Intens, persist, Distract, Thresh の 6 カテゴリーに統計的な有意差を認めた。9 カテゴリー中 6 カテゴリーに差が認められたことは、養護施設入所児童特有の気質的特徴を示している可能性がある。つまり、児童養護施設で生活する子どもの気質的特徴は、新しいものに対して回避的で、新しい環境に慣れにくく、自己表現の仕方が弱く、注意を向ける幅が狭く長続きしにくく、物事にこだわりやすく、反応の閾値が高い(敏感でない)傾向であることを示唆するものである(表 2, 図 6)。

表 2 対象児童カテゴリー値

	Activity	Rhythm	※※ App/With	※※ Adapt	※※ Intens	Mood	※※ Persist	※※ Distract	※※ Thresh
対象児童	3.55 (0.64)	2.83 (0.57)	3.42 (0.77)	3.54 (0.62)	4.14 (0.70)	3.25 (0.58)	3.40 (0.69)	3.31 (0.59)	3.42 (0.51)
標準値	3.56 (0.75)	2.75 (0.68)	2.99 (0.94)	2.55 (0.72)	4.52 (0.65)	3.31 (0.68)	2.87 (0.69)	3.89 (0.81)	3.98 (0.60)

() 内は SD を表す

※※p<.01

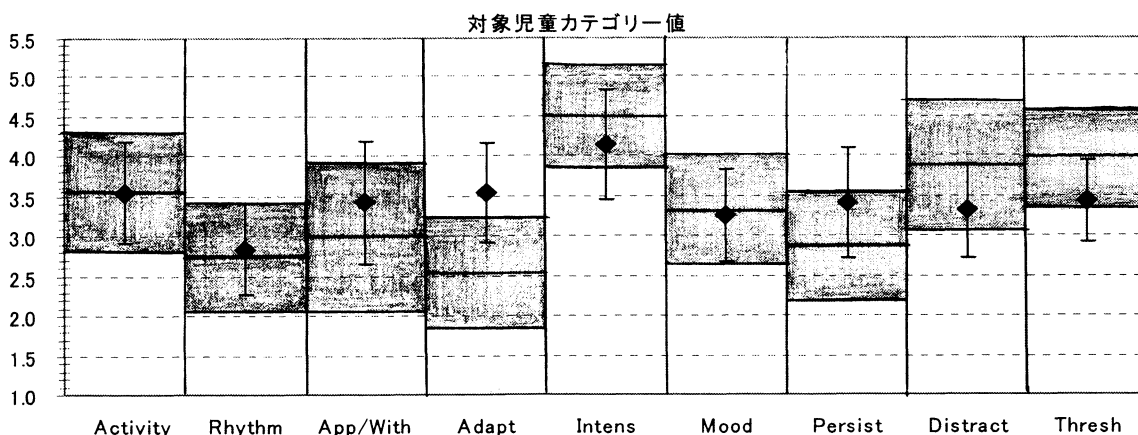


図 6

②性差

統計的には、Activity, App/With, Distract, Thresh に有意差が認められた。男児は女児よりも、活動性が高く、新しいものに対して近付こうとし、こだわりがちで、反応の閾値が高く（敏感ではなく）、女児は男児よりも、活動性は低く、新しいものに対してはさける傾向があり、すぐに注意がそれやすく、反応の閾値が低い（敏感である）ことを示唆するものであった（表3, 図7）。

③年齢別（未記入2例は除く）

年齢による差異では、Persist のみに統計的有意差を認め、3歳児は6歳児（ $p < .05$ ）に比べ、注意の範

囲が狭く長続きしないことが示唆された（表4）。

④入所期間（未記入10例除く）

統計的には、入所期間別による各カテゴリー値間に有意差は認められなかった（表5）。

⑤措置理由別

措置理由別による各カテゴリー値の差は、App/With で、0.10以上の差が見られたが、その他は0.10以下の差異しか見られず、統計的に見ても有意差は認められなかった（表6）。

4 考察

本研究では、1) 児童養護施設で生活する子ども達

表3 性別カテゴリー値

	※※ Activity	Rhythm	※ App/With	Adapt	Intens	Mood	Persist	※※ Distract	※※ Thresh
男児 N=133	3.70(0.70)	2.79(0.57)	3.33(0.70)	3.56(0.63)	4.09(0.71)	3.25(0.58)	3.47(0.67)	3.20(0.57)	3.29(0.52)
女児 N=112	3.40(0.61)	2.87(0.57)	3.53(0.82)	3.51(0.61)	4.20(0.69)	3.26(0.60)	3.36(0.72)	3.45(0.59)	3.54(0.47)

() 内は SD を表す

※ $p < .05$ ※※ $p < .01$

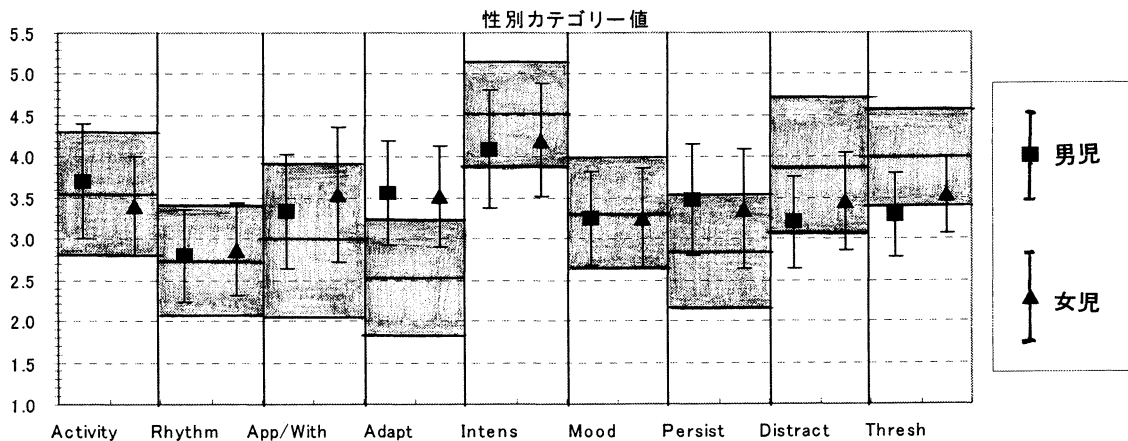


図7

表4 年齢別カテゴリー値（年齢未記入2名は削除）

	Activity	Rhythm	App/With	Adapt	Intens	Mood	Persist	Distract	Thresh
3歳児 N=48	3.77(0.64)	2.84(0.71)	3.65(0.88)	3.66(0.59)	4.24(0.61)	3.30(0.55)	※ 3.69(0.83)	3.41(0.69)	3.39(0.56)
4歳児 N=39	3.46(0.72)	2.89(0.61)	3.39(0.61)	3.43(0.56)	4.30(0.7)	3.40(0.45)	3.27(0.63)	3.32(0.54)	3.50(0.47)
5歳児 N=42	3.62(0.80)	2.69(0.55)	3.34(0.82)	3.43(0.66)	4.00(0.52)	3.14(0.62)	3.31(0.62)	3.21(0.66)	3.47(0.53)
6歳児 N=59	3.44(0.58)	2.83(0.52)	3.35(0.73)	3.54(0.69)	3.98(0.82)	3.16(0.63)	※ 3.31(0.64)	3.27(0.56)	3.39(0.52)
7歳児 N=55	3.53(0.65)	2.88(0.47)	3.37(0.72)	3.59(0.59)	4.23(0.73)	3.30(0.61)	3.49(0.67)	3.36(0.53)	3.32(0.50)

() 内は SD を表す

※ $p < .05$

表5 入所期間別カテゴリー値 (未記入10名は削除)

	Activity	Rhythm	App/With	Adapt	Intens	Mood	Persist	Distract	Thresh
0~11 M N=72	3.62(0.65)	2.86(0.57)	3.44(0.81)	3.39(0.64)	4.05(0.67)	3.19(0.63)	3.56(0.86)	3.38(0.62)	3.42(0.58)
12~23 M N=56	3.51(0.57)	2.87(0.68)	3.39(0.79)	3.52(0.50)	4.12(0.72)	3.22(0.57)	3.39(0.58)	3.29(0.58)	3.36(0.54)
24~35 M N=43	3.70(0.77)	2.79(0.55)	3.26(0.7)	3.44(0.62)	4.27(0.73)	3.27(0.52)	3.29(0.66)	3.37(0.57)	3.45(0.51)
36~47 M N=33	3.38(0.58)	2.89(0.49)	3.49(0.72)	3.76(0.61)	4.24(0.64)	3.33(0.62)	3.42(0.61)	3.19(0.66)	3.42(0.36)
48~59 M N=19	3.38(0.65)	2.80(0.46)	3.55(0.79)	3.78(0.59)	4.16(0.69)	3.36(0.48)	3.34(0.67)	3.33(0.54)	3.48(0.47)
60 M~ N=12	3.62(0.80)	2.62(0.49)	3.45(0.77)	3.73(0.77)	4.27(0.68)	3.48(0.54)	3.46(0.59)	3.19(0.45)	3.12(0.44)

() 内は SD を表す

表6 措置理由別カテゴリー値

	Activity	Rhythm	App/With	Adapt	Intens	Mood	Persist	Distract	Thresh
虐待 N=60	3.57(0.68)	2.89(0.61)	3.29(0.81)	3.55(0.70)	4.09(0.71)	3.13(0.57)	3.46(0.79)	3.25(0.66)	3.45(0.56)
非虐待 N=185	3.56(0.68)	2.81(0.56)	3.46(0.75)	3.53(0.60)	4.15(0.70)	3.29(0.58)	3.41(0.66)	3.33(0.57)	3.39(0.50)

() 内は標準偏差を表す

と幼稚園や保育所に通う子ども達との間に気質類型の差異があるのか、2) 措置理由によって気質カテゴリー間に差異はあるのか、3) 児童養護施設で生活する子どもには標準値との間に気質カテゴリーの差異があるのか、4) 性別による気質カテゴリーの差異はあるのか、5) 年齢によって気質カテゴリーの差異はあるのか、6) 入所期間によって気質カテゴリーの差異はあるのかについて検討し、児童養護施設という特殊な環境下での生活する子どもの理解を深め、児童養護施設で生活を送る子どもの成長・発達や人格形成を支援するための一方策を探ることを目的としていた。これらについて、順に検討していく。

- 1) 入所児童全体の気質類型は、明らかに一般集団とは違っていた。アメリカ、イギリス、中国、日本での一般児童を対象とした先行研究では、「Easy」児は約40%、「STWU」児が15%、「Diff」児は10%の分布を示しているが、今回の結果からは「I-L」児と「STWU」児とで全体の60%を占め、一般的に最も多いとされる「Easy」児は14%にすぎない。養護施設入所児童は、子どもが集団生活を送る保育所・幼稚園といった環境の子どもとは異なった集団であることが判明した。
- 2) 気質類型は、性別・年齢・入所期間・措置理由

との関係は明らかでなかった。虐待が措置理由になっている児童と非虐待児との気質類型の差異があるのであろう、という仮説をたてたが、差異は認められなかった。

- 3) 気質カテゴリーの検討では、9カテゴリー中6カテゴリーに標準値との間に明らかな差を認めた。このことは、養護施設入所児童特有の気質的特徴を示している。児童養護施設で生活する子どもの気質的特徴は、新しいものに対して回避的で、新しい環境に慣れにくく、自己表現の仕方が弱く、注意を向ける幅が狭く長続きしにくく、物事にこだわりやすく、反応の閾値が高い(敏感でない)傾向であることを示していた。
- 4) 性差での差異は、Activity, App/With, Distract, Thresh に認められた。男児は、活動性が高く、新しいものに対して近付こうとし、こだわりがちで、反応の閾値が高く(敏感ではなく)、女児は、活動性は低く、新しいものに対してはさける傾向があり、すぐに注意がそれやすく、物事に対して敏感であることを示していた。一般的に気質カテゴリーの性差は認められずこの点も新しい注目すべき点であろう。養護施設の養育者は、子どもに対応する場合に性別にも注意する必要がある

う。

- 5) 年齢別では、9 カテゴリー中 Persis のみに認められた。3 歳児は 6 歳児に比して、注意の範囲が狭く持続的でなく、集中時間は長続きしない。しかしながら、他の 8 カテゴリーでは差異は認めず、年齢による気質的特徴はほとんど認められない。
- 6) 入所期間と措置理由による差異も認められなかった。養護施設で生活している期間の長さが行動特徴に影響しているのであろう、という仮説を立てたが、関係は認められなかった。そして、措置理由別（虐待児・非虐待児）とでは行動特徴の差異があるのであると、という仮説にも、関係は認められなかった。

児童養護施設で生活をする子どもとは、何らかの理由で家庭での生活を保証されていない子ども達である。子どもの側から考えると、maltreatment と捉えられるが、子ども自身のもっている気質的特徴を調査研究した結果、明らかに特徴が認められることが判明した。気質類型を見てみると、Easy が少なく、STWU が多い。気質カテゴリーにおいても、9 カテゴリー中 6 カテゴリーに標準値との間に明らかな差を認めた。

子どもの生活の場として、児童養護施設は特異な環境下であり、子どもの処遇に際しては、より高い専門的援助及び、より深い子ども理解が必要である。児童養護施設で生活する子どもの気質的特徴を把握することによって、子どもに対しての、より適切な処遇が可能となり、一人ひとりの子どもに寄り添った養育が可能となるであろう。ゆえに、本研究結果は、児童養護施設で生活をする子ども理解を深め、より適切な援助をしていくには、意味のある結果であると考えられる。

V ま と め

子どもの気質と養育者の養育態度や育児ストレス等の間には、ある種の相関関係があるという事が、わが国における気質の先行研究でも明らかにされている。

例えば、①高岸らは、「普通幼稚園に通う 5.6 歳児において、difficult child は、育児上困る自律機能・行動上の問題をもつことが多く、その母親の養育態度の特徴としては不満的態度を示しやすく、父親は、不一致的な養育態度に問題を示しやすという結果であった」¹⁴⁾と報告している。また、②水野は第一子を対象として子どもの気質と母親の育児ストレスとの関連を

調べたところ、「気質診断類型による difficult の子どもを持つ母親の育児ストレスは、そうでない子どもを持つ母親のそれに比較して有意に高かった」¹⁵⁾と報告している。他にも、③齊藤は、「子どもの気質得点が高い場合、育児の自信のなさが高くなることから、子どもの気質を難しい、扱いにくいと感じている母親は、育児に対する自信を持ちにくい」¹⁶⁾と報告しており、④宮本らは、4 ヶ月児の気質と、母親の養育態度・育児疲労状況等との関連性についての検討を行ったまとめとして、「全般的に手のかかりやすい子の母親で、育児に関するイライラ感を頻回に訴えるものが有意に高かった」¹⁷⁾と報告している。また、⑤麻原らは、「気質カテゴリー得点のうち活動性、規則性、順応性、気分の質、持続性 JHSQ¹⁸⁾ 得点との間に有意な負の相関がみられた」としており、さらに、「Diff・STWU・I-H・I-L・Easy の順に JHSQ の得点が高かった」¹⁹⁾と報告している。つまり、気質類型に Diff 傾向を示す子どもほど、すなわち、外界に対して慣れにくい子どもほど、養育環境に疑問がある（正常ではない）という事を示唆するものであると言えよう。

Easy や Diff と言った、気質類型は大人からの視点で分類されたものであるが、Diff を示す子どもの気質的特徴は、生理的機能の周期は不規則で、反応を強く表し、初めての事態では消極的でしり込みしがちであり、環境の変化には慣れにくく、機嫌の悪いことが多いということから、養育者にとって「扱いにくい」と思わせる要素があるのは否めない。その結果として、養育者は育児に対するストレスや自信のなさを感じてしまい、子どもの気質と養育者の養育態度の間、すなわち、子どもと養育者との関係の「適合の良さ」が図りにくくなる可能性が高くなることが考えられる。このような現象が、一時的なものではなく、長期に亘って持続された場合、子どもの健康な成長・発達や人格形成に影響を及ぼす可能性があると考えられる。

しかしながら、気質的特徴は子どもの健康な成長・発達や人格形成上問題となるのであろうか。子どもの成長・発達や人格形成は、子どもと養育者との関係が中核をなし、重要であることは周知の事実ではあるが、子どもは子どもと養育者の関係のみで育まれているわけではない。その他にも、養育者自身の人格の問題、さらには、文化的・歴史的環境や、社会・経済的環境、物理的な環境等が複雑に関与しているであろう。

Thomas & Chess が、「調和とは、決して抽象的なものではなく、常に一定の文化や社会経済的集団の価値

や要求にそった適合のよさなのである』³⁰と述べている。さらに、「適合が良いからといって、ストレスや葛藤がないわけではないことは強調しておく必要があるだろう。また、その逆の場合もあるだろう。これらのストレスや葛藤は、発達の過程に付随して不可避免的に起こるものであり、その過程で、変化を求める新たな期待や要求と、だんだん高度になる活動水準が、年齢とともに連続して生じるのである。……行動にあらわれた異常な活動に含まれる問題というのは、環境からの期待や要求と、ある特定の発達水準における子どもの能力との間の適合の悪さから過剰なストレスが生まれることがむしろ問題と言えるのである』³¹と述べている。

また、足立らは、「子どもの気質的特徴と母親の養育態度には強い関連があることが示唆される』³²と述べているが、一方では、「STWU, I-H では、扱いにくいと知覚する母親よりも、扱いやすいと知覚する母親の比率が大きく、Diff でも、過半数の母親は普通または扱いやすいと知覚していることも示している。すなわち、STWU や Diff の母親の多くは、子どもを扱いにくいとは知覚していないのである』³³と述べている。

言い換えれば、子どもの気質的な特徴や気質類型と育児ストレス・養育態度との間に関連があったとしても、養育者の子どもに対する“扱いやすさ”、“扱いにくさ”の認知は異なるということである。養育者が子どもの気質的な特徴をどう認識しているのか、養育者は子どもをどう受け止め、どういう眼差しで子どもを見ているのかという事と、実際の子どもの気質的特徴とは必ずしも一致しているわけではないということである。子どもの気質的な特徴そのものが養育者に扱いにくさを感じさせたり、ストレスを与えてしまうこともあるが、養育者自身に内在するものを子どもの気質的な特徴によって触発され、子どもと養育者の適合の悪さを生み出していることもあるであろう。ゆえに、子どもの気質的特徴や、“Easy”や“Diff”といった、気質類型そのものが問題となるのではなく、現時点で養育者がどう受け止め、理解しているかということが大切なのである。子どもの気質的特徴と気質類型を理解することによって、子どもに対する視野を広げることが可能となり、子どもと養育者との関係の適合性を調整するという事に繋がるのである。

児童養護施設で生活をする子どもたちは、それぞれに様々な家庭問題を抱えており、通常の家とは異なる特殊な環境下で生活を営みながら成長・発達や人格

形成の過程をたどっているので、子ども一人一人への子ども理解や専門的援助が重要かつ必要である。子ども理解というのは、個々の子どもの能力を見極めることのみではなく、自己性のありようの違い、すなわち、内面的特徴によって外在化される気質（行動特徴）を理解するという事も重要である。そして、専門的援助とは、個々の子どもの自己性にどう寄り添うかという事であろう。子どもの成長・発達や人格形成を決まった道筋でたどる発達課題のみから理解しようとするのではなく、個々の子どもが持つ状況や自己性・養育者との関係の中で営まれている発達過程などの多くの側面から理解をしていかなければならない。ゆえに、養育者、あるいは子どもに関わる専門家たちは子どもの気質的特徴を確認し、子どもへの眼差しを多面的な方向性から持つという作業をしていかなければならないであろう。本論文では、児童養護施設で生活する子どもの気質的特徴側から問題を考察したが、今後は、実際の子どもの気質的特徴と養育者の子どもの気質的特徴に対する印象との差異について考察し、子どもと養育者の関係性について検討することが課題であると考えている。

注

- 1) 庄司順一「子どもの気質に関する研究(3)－NYLSにおける「気質」概念の検討－」, 日本子ども家庭総合研究紀要第34号, 1997, P. 184
- 2) 庄司 前掲書 P. 184
- 3) 庄司 前掲書 P. 184
- 4) 誠信『心理学辞典』, 誠信書房, 1981, P. 88
- 5) 庄司順一: IV 気質の評価『別冊 発達8: 発達検査と発達援助』, ミネルヴァ書房, 1988, P. 132
- 6) Kernberg PF, Weiner AS, Bardenstein KK *Personality disorders in children and adolescents*. Basic Books. 2000 P. 16~19
- 7) Thomas A, Chess S *Temperament—Theory and practice*. Bruner/Mazel, New York, 1996, P. 23~30
- 8) Thomas A, Chess S *GOODNESS OF FIT: Clinical Applications From Infancy Through Adult Life*. Bruner/Mazel, New York, 1999, P. 3~9
- 9) 三宅和夫『子どもの個性—生後2年間を中心に—』, 東京大学出版会, 1990, P. 46
- 10) 佐藤俊昭「子どもの気質の追跡研究—序報—」, 東北大学教養部紀要第43号, 1985, P. 157~P. 158
- 11) 稲垣由子, 戸松玲子「兵庫県児童養護施設入所児童実態調査—子どもの気質について—」, 兵庫県児童連絡協議会, 2002 P. 9~27
- 12) 庄司順一『別冊 発達8: 発達検査と発達援助: IV 気質の評価』, ミネルヴァ書房, 1988, P. 130
- 13) 佐藤俊昭, 川添良幸, 仁平義明「子どもの気質の研究—第1報: 仙台とその近郊のゼロ歳児の気質—」, 東

北大学教養部紀要 47, 1987, P. 141~142

- 14) 高岸由香, 宅見晃子, 稲垣由子, 中村 肇「幼児の自律機能・行動上の問題・気質と親の養育態度の関係」, 小児の精神と神経第 36 巻第 4 号, 1996, P. 323
- 15) 水野里恵「乳児期の子供の気質・母親の分離不安と後の育児ストレスとの関連：第一子を対象にした乳児期の縦断研究」, 発達心理学研究第 9 巻第 1 号, 1998, P. 63
- 16) 齊藤早香枝「子どもの気質に関する母親の認識と母子愛着関係」, 北海道大学医療技術短期大学部紀要 11 号, 1998, P. 22~P. 23
- 17) 宮本信也, 山中恵子, 洪川典子「小児の気質と母親の養育態度—4ヶ月児における検討—」, 安田生命社会事業団研究助成論文集 25, 1989, P. 121
- 18) JHSQ とは, 日本版乳幼児の家庭環境評価法のことである。この質問紙は養育環境に問題がありそうな家庭をスクリーニングするためのものであり, 19 (~16) 点以下が疑問, 20 (~17) 点以上が正常である。(麻原きよみ, 村嶋幸代, 飯田澄美子「幼児の気質と発達に関する研究 (第 1 報) 幼児の気質と母親の認知, 養育環境の相互関連性」, 日本公衆衛生誌第 39 巻第 9 号, 1992, P. 698)
- 19) 麻原きよみ, 村嶋幸代, 飯田澄美子「幼児の気質と発達に関する研究 (第 1 報) 幼児の気質と母親の認知, 養育環境の相互関連性」, 日本公衆衛生誌第 39 巻第 9 号, 1992, P. 701
- 20) Thomas A, Chess S *The Dynamics of Psychological Development*. Bruner/Mazel, New York, 1980 (林 雅次監訳「子どもの気質と心理的発達」, 星和書店, 東京, 1981) P. 92
- 21) Thomas A, Chess S 前掲書 P. 92
- 22) 足立智昭, 古田倭文男, 佐藤俊昭「幼児の気質的特徴と母親の育児態度との関連Ⅱ」, 日本心理学会第 61 回大会発表論集, 1997, P. 316
- 23) 足立, 古田, 佐藤 前掲書, P. 316

参 考 文 献

- 草薙恵美子「乳児の気質の構造：情動表出傾向および接近傾向における一考察」, 発達心理学研究第 4 巻第 1 号, 1993
- 鯨岡 峻「関係発達論の構築—間主観的アプローチによる—」, ミネルヴァ書房, 1999
- 鯨岡 峻, 鯨岡和子『保育を支える発達心理学 関係発達保育論入門』, ミネルヴァ書房, 2001
- 佐藤俊昭「子どもの気質の追跡研究—第 2 報・日本語版 ITQ-R とその使用経験」, 東北大学教養部第 49 号, 1988
- 佐藤俊昭「子どもの気質の追跡研究—第 3 報・1~2 歳児の気質とその安定性」, 東北大学教養部第 54 号, 1990
- 佐藤俊昭「いま, 気質の何が問題なのか」, 東北福祉大学研究紀要第 24 巻, 1999
- 白橋宏一郎, 佐藤俊昭「異常行動の予測の研究—乳幼児の気質診断を中心として—」, 安田生命社会事業団年報通巻第 18 号, 1982
- 庄司順一, 前川喜平「乳児の気質—その意義と評価法—」, 小児科診療第 44 巻第 8 号, 1981
- 菅原ますみ, 北村俊則, 戸田まり, 島 悟, 佐藤達哉, 向井隆代「子どもの問題行動の発達：Externalizing な問題傾向に関する生後 11 年間の縦断研究から」, 発達心理学研究第 10 巻第 1 号, 1999
- 千葉 良, 古田倭文男「幼稚園における 4, 5 歳児の気質調査」, 仙台赤十字病医誌第 5 巻 1 号, 1996
- 千葉 良, 古田倭文男「幼稚園児の行動上の問題と気質」, 仙台赤十字病医誌第 5 巻 1 号, 1996
- 古田倭文男「気質的に「DIFFICULT」な子どもをめぐる諸問題」, 宮城学院女子大学紀要第 64 号, 1986
- 古田倭文男, 佐藤俊昭「“扱いやすい子” “扱いにくい子” の気質」, 宮城学院女子大学紀要第 67 号, 1988
- 古田倭文男, 佐藤俊昭「子どもの気質の Difficulty の数量化—Index of Difficulty の検討—」, 宮城学院女子大学 171 号, 1990
- 水野里恵, 本城秀次「幼児の自己制御機能：乳児期と幼児期の気質との関連」, 発達心理学研究第 9 巻第 2 号, 1998
- Robin Karr-Morse and Meredith S. Wiley *Ghosts from the Nursery—Tracing Roots of Violence*, Atlantic Monthly Press, 1997